



モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査 ニュースレター



環境省自然環境局生物多様性センター / NPO法人バードリサーチ

2016年 春期概要

2016年春期の結果概要

モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の2016年度春期概要をお知らせします。

春期の個体数は2000年以来最小に

2016年度春期調査は、2016年4月1日から2016年5月31日までの期間実施されました。120ヶ所の調査サイトで調査が実施され、このうち一斉調査(4月24日を基準日とした前後1週間の調査)への参加は107ヶ所でした。一斉調査期間では、シギ・チドリ類42種31,843羽、ツクシガモ1,049羽、ヘラサギ14羽、クロツラヘラサギ87羽、ズグロカモメ11羽が記録され、春期の全サイトの最大個体数(調査期間内に記録された各種個体数の最大値)の合計では、シギ・チドリ類55種72,577羽、ツクシガモ2,998羽、ヘラサギ34羽、クロツラヘラサギ207羽、ズグロカモメ204羽が記録されました。

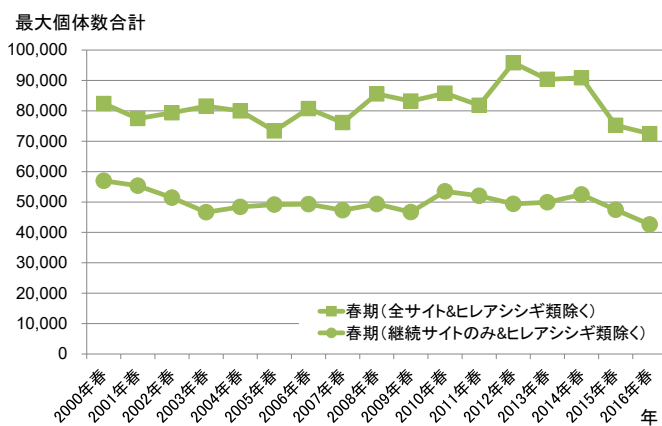


図1. 春期調査におけるヒレアシシギ類を除いた最大観察数の合計(■)と、ヒレアシシギ類を除いた継続サイトのみでの最大観察数の合計(●)の推移 (2000年から2016年の継続サイトN=45)

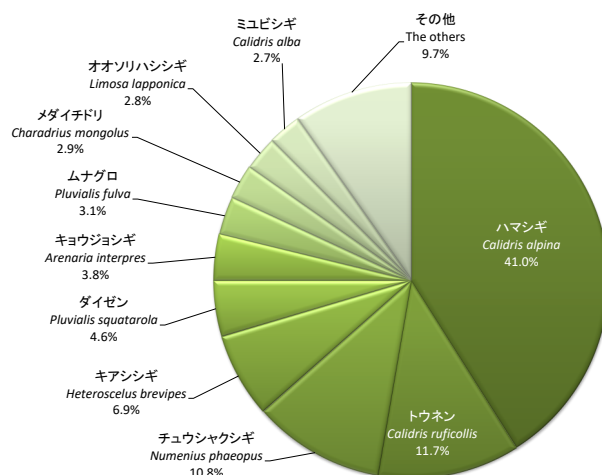


図2. 2016年春期調査の優占種

2000年から調査が継続されているサイトの「ヒレアシシギ類を除いた合計」と、全サイトの「ヒレアシシギ類を除いた合計」を図1に示します。内陸・沿岸の湿地に依存していないヒレアシシギ類を除いた最大観察数の全サイト、継続サイトの各合計は、どちらも2000年以降、最小の値となりました。前年と比べた減少比は、全サイトでは約3,000羽減少(-3.7%)、継続サイトでは約5,000羽が減少(-10.2%)していました。継続サイトでは昨年も約10%の減少を示しており、近年の減少のペースが危惧されます。

最大個体数における優占種の構成の上位5種は、ハマシギ(41.0%)、トウネン(11.7%)、チュウシヤクシギ(10.8%)、キアシシギ(6.9%)、ダイゼン(4.6%)で、上位4種の順位、優占率とも2015年度春期と大きな変化はありませんでした(図2)。特定の4種では、2015年度と比較すると、クロツラヘラサギが一斉調査期間203羽→87羽、全調査期間274羽→207羽となっており、全期間ではあまり変化がないものの一斉調査期間(4月中旬)では個体数が昨年より減少しており、昨年に比べて渡去が早かったのではないかと考えられます

ハマシギ・トウネンが減少

直近5年間の2012年～2016年まで欠測のない調査をしている95サイトを対象に、春期の最大個体数の合計値を表1に示しました。今年の春期の個体数が減少した理由として、春期の観察個体数の半数を占めるハマシギとトウネンの減少個体数が大きかったことが挙げられます。減少した合計個体数の約65%を占め、全体の個体数に占める割合も約60%であるため大きく影響しています。また、上位20種の内、減少率では、キョウジョシギ(-37.3%)、メダイチドリ(-25.5%)、シロチドリ(-14.3%)、ハマシギ(-13.0%)、ムナグロ(-11.7%)の順で減少率が高くなっています。逆に増加率では、タカブシギ(+49.4%)、オバシギ(+26.2%)、コチドリ(+20.2%)、オオソリハシシギ(+19.9%)、ダイゼン(+19.0%)の順で高くなっています。上位10種に関して2012年から2016年までの動態を図4に示します。トウネン、ムナグロ、キョウジョシギは2012年の個体数と比べると約50%の減少となっており、ハマシギ、ミユビシギ、オオソリハシシギも20%以上減少しています。また2014年には2012年と比較し約180%以上の個体数だったメダイチドリも今年春は大きく減少していました。減少している種について

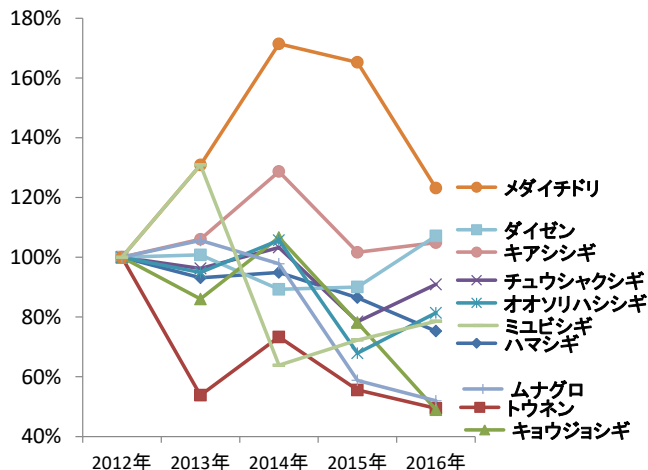


図4. 2012年～2016年連続調査地のみの春期最大個体数合計上位10種の近年の動態。2012年の結果を基準としている。N=95

は、メダイチドリを始めとして2014年を境に減少に転じている種が、ムナグロ、ハマシギ、トウネン、キョウジョシギがいました。また、ダイゼン、ミユビシギ、オバシギ、セイタカシギ、タカブシギは2014年に落ち込んでからは増加傾向です。これらの同様の動態を示している種をまとめ分析することで減少や増加の要因が明らかになるかも知れません。

表1. 連続調査地の2015年、2016年の春期最大個体数上位20種の個体数。前年度より減少した数を赤字で示す。N=95

	2015年春	2016年春	増減数	増減率
1 ハマシギ	32,616	28,390	-4,226	-13.0%
2 トウネン	9,314	8,286	-1,028	-11.0%
3 チュウシャクシギ	5,883	6,818	935	15.9%
4 キアシシギ	3,979	4,106	127	3.2%
5 ダイゼン	2,784	3,313	529	19.0%
6 キョウジョシギ	3,920	2,457	-1,463	-37.3%
7 オオソリハシシギ	1,687	2,023	336	19.9%
8 メダイチドリ	2,515	1,874	-641	-25.5%
9 ムナグロ	2,051	1,812	-239	-11.7%
10 ミユビシギ	1,134	1,233	99	8.7%
11 アオアシシギ	1,003	1,170	167	16.7%
12 ソリハシシギ	913	999	86	9.4%
13 ミヤコドリ	684	768	84	12.3%
14 シロチドリ	593	508	-85	-14.3%
15 オバシギ	328	414	86	26.2%
16 コチドリ	292	351	59	20.2%
17 ケリ	263	273	10	3.8%
18 セイタカシギ	244	271	27	11.1%
19 タカブシギ	154	230	76	49.4%
20 イソシギ	198	221	23	11.6%
その他の種	1300	1060	-240	-0.185
合計	71,855	66,577	-5278	-0.073

アラスカの繁殖状況

ハマシギは2012年から徐々に個体数が減少しています。ハマシギについては、ロシアのチェコト半島で繁殖する亜種 *Calidris alpina sakhalina* が日本を通過せず主に大陸沿いに移動しているという報告が昨年ありました (Bentzen, 2016)。そのため、日本を通過している主な個体群は日本での越冬が確認されているアラスカで繁殖する亜種 *C. a. arctica* であると考えられ、国内の動向は本亜種の減少を示す可能性があります。他種に関しても日本に渡来する地域個体群を特定することは保全上重要と考えられます。



図3. ハマシギ

Bentzen, R., Dondua, A., Porter, R., Robards, M. & Solovyeva, D.. 2016. Large-scale movements of Dunlin breeding in Chukotka, Russia, during the non-breeding period, Wader Study Vol. 123.

モニタリングサイト1000 シギ・チドリ類調査 ニュースレター

タイトル写真:エリマキシギ・コアオアシシギ(守屋年史)★タイトル写真募集中!

2016年 春期概要

発行元: 環境省自然環境局生物多様性センター <http://www.biodic.go.jp/moni1000/>

編集: 特定非営利活動法人 バードリサーチ <http://www.bird-research.jp/>

編集者 守屋年史・奴賀俊光 電話/Fax:042-401-8661 メール: shigichi@bird-research.jp